

オープン  
カレッジ

現実の経済現象を観察すると、初学者用の経済学の教科書に書かれている内容とは異なり、経済主体が合理的ではない行動を行うため、そのメカニズムをうまく説明できない現象、いわゆるアノマリーがしばしば見受けられる。特にわが国では、干支(えと)に起因する迷信によって大きな経済的な影響が生じる事例が知られている。

第一に取り上げる例は、山形県の年間三隣亡の事例である。これは、同県で見られる特異な現象である。本来、日ごとの概念である三隣亡について、山形県では立春から翌年の節分まで

## 迷信が実体経済に与える影響

工が顕著に減少するというアノマリーがみられる。これは、「三隣亡の年に家を建てると向こう三軒両隣を火事で焼き滅ぼす」という全く根拠のない迷信が明治期以降広まったことによるもので、山形県の建設業界では常識となっていた。過去15回の三隣亡年の住宅着工戸数の前年比を全国と比べると、山形県が平均9・6%も全国を下回っており、また簡単な住宅投資関数を推計すると、三隣亡年は通常の年と比べて2割程度は落ち込むことが確認できる。

これは、明治期の太陰暦から太陽暦にかわる頃に暦売りが誤った暦注(先勝、大安、三隣亡などの暦についての注記)をつけた暦を販売し、これは三世代同居が多く、人口移動が少ない同地域において定着したものである。

現象がみられている。人口統計における最近の丙午の出生数の対前年比をみると、1906年14・0%減、1966年25・4%減である。一見すると1906年は影響が小さいように見受けられるが、そもそも人口増加トレンドがある中でのマイナスであるうえ、自殺者や堕胎が広がったこと、統計上の改ざんがみられたことなども踏まえると、社会的な影響は、66年にも増して深刻だったようである。

実はこの丙午における出生数の減少は17世紀以前にはみられず、この現象が広がったのは、井原西鶴が1686年に好色五人女の巻四で八百屋お七を著して以降である。八百屋の娘お七が恋仲を引き裂かれてしまった下村奉公の吉三郎を放火によって殺してしまったという話だが、このお七の生まれた年が丙午だったとされ、これが稀代のベストセラー作家の浮世草子とともに広がったのである。

その後、こうした誤った迷信を撲滅させるため高僧が「さとし文」を著すなど、さまざまな対策が講じられたが、逆効果だったとの記録もある。

来年、2026年は丙午の年である。かつて年間200万人を超えていた出生数は24年72万人台にまで減少し、こうした少子化はわが国経済の活力に大きな影響を与えている。ここで前回並みの落ち込みが起こると、わが国経済に致命的な影響となることは想像に難くない。今からでも政策対応の是非を検討すべきであろう。

# 2026年

## 丙午の出生数は？

を通しての年間三隣亡として認識する習慣があるのだが、その年間三隣亡に当たる寅・午・亥の年に住宅着



山形大学経済学部教授  
植林 茂  
山形大学経済学部教授  
植林 茂

うえばやし・しげる 金融。埼玉大学大学院経済科学研究科博士後期課程修了。博士(経済学)。日本銀行、埼玉大学大学院客員教授などを経て現職。